

小説の小道具について（アルジャーノンとは何か？）

岡崎 眞大

私は文字というものを覚えてから、かなりの数の本を読んできた。ノンフィクションや学術書なども読んだが小説と呼ばれる本がメインである。専門ゼミナールで取りあげた「アルジャーノンに花束を」は今まで読んだ中でも面白さという点では上位に位置づけられる作品である。御存知のとおり、この作品は多くの人に支持され、ある年のベストセラーになった。しかしなぜあそこまで売れたのかは少々疑問である、と言うのも作者のダニエル・キイスは全く無名の作家だったからだ。

良い小説には効果的な小道具が存在するという話を聞いたことがある。「アルジャーノンに花束を」にも多数の人々に支持されたからにはその小道具が効果的に使われていると思われる。作者が狙った効果とは違った受けとり方をしてしまうかもしれないが、作品の中で最も重要と思われる小道具を探してみようと思う。

この物語は知能指数の低いチャーリーという主人公が最先端の手術により天才的な頭脳の持ち主へと変身していく様子をチャーリーの日記形式としてつづられたものである。チャーリーの知性が向上する様子をわかりやすく説明する為の小道具が幾つかある。例えば手術前のチャーリーは紙に書かれた迷路でネズミのアルジャーノンとの競争で負けていたが手術後には完全勝利を収めた。この迷路競争はチャーリーの知能向上を理解させる為の小道具である。しかしこれらは、それほど重要な小道具ではない。なぜなら作品全体を象徴するようなものではないからだ。何度か作品を読みかえした結果、アルジャーノンこそが最も重要な小道具であると思われる。アルジャーノンはチャーリーより先に増脳手術を受けた実験用のネズミで、最初のうちはチャーリーよりもかしこい存在として登場している。これはチャーリーの未来の姿として受け取ることができる。のちにアルジャーノンは知能が後退してゆき、最終的にはその副作用で死んでしまう。同様にチャーリーも急速に知能の低いもの自分へと戻ってゆくが、最終的にどうなったのかは語られず物語は幕を降ろしてしまう。しかし読者はアルジャーノンの例により、主人公チャーリーがどうなったのかを推測することが出来るのだ。このアルジャーノンという小道具は実に上手い使われ方をされているのだ。

これまで書いてきた事はあくまでも私の考えであって、他の人はさらに重要とされる小道具を見つけることができると思う。読書好きの人には、このように小道具に注目して本を読むと、より深くその内容が理解できると思うのでぜひ試して頂きたい。

（指導教員 中村 敦志）